



ひとみしり克服ロボット

川路 新吉

# ひとみしり克服ロボット

タナカが研究所についたとき、後輩のサトウのため息をつく姿が目についた。

「どうした浮かない顔してるな」

顔を上げたサトウは浮かない顔をしている。

「実はいここにやっかいな相談をもちかけられて」

「いどこ？女か？」

「いや男なんですけど」

タナカの興味は目に見えて薄れたが、サトウは続けた。

「ぼくより年上でいい歳なので、そろそろ結婚したいとお見合いを何度も受けているんですけど、なかなかうまくいかないんです」

「おじさんなんて興味ないよ」

「そんなこと言わないでくださいよ。原因はわかってるんです」

「わかってるならいいじゃないか」

「そんな投げやりにいわないでくださいよ」

「なんなんだ原因は」

「原因は人見知りらしいんです」

「人見知り？いい歳した男が何をいってるんだ」

「もともと人づきあいが苦手な人なんですけど、目がだめらしいんです」

「目がだめ？」

「ええ、どうしても目を見て話すことができないっていうんですよ」

「まったくしかたのないおっさんだな」

そうやってタナカは奥の倉庫に消えた。サトウがどうしたんだろうと思っていると、すぐに何かを抱えて戻ってきた。

「これ使え」

タナカが渡したのはロボットの胸像だった。鉄パイプの骨組みがむき出しで、かろうじてシルエットで人型だとわかる。

だが、一カ所だけイヤにリアルな部品があった。人間のものと見間違うほどの瞳がついている。

「何ですか？これ」

少し不気味に感じながらサトウが聞くと、タナカは面倒くさそうにこたえた。

「むかし作った受付ロボットの試作品だ。皮はつけてないからいかにもロボットだけど、眼球部分はしっかり作ってある。これを練習台にしたらどうだ」

サトウは、タナカのぶつくさ文句を言うくせになんだかんだ後輩思いなところが好きだ。

「ありがとうございます！」

「先輩、先日はありがとうございました」

タナカは何のことを言われてるのかすぐには思いつかなかったが、サトウの手元にあるものを見て思い出した。

「それ、役に立たなかったのか」

そこにあったのは、サトウのいところのために渡した受付ロボットの試作品だった。

「いや、結構効果はあったみたいなんです。いままでよりははずいぶんと話しやすくなったみたいです。けど、やっぱり肝心なところではうまくいかないらしくて」

「ふーん。困ったもんだな」

「なんでも、この前の相手は透き通るような白い肌にロングの黒髪がばちっときまってて、それに圧倒されてしまったらしいんです」

「白い肌に黒髪ねえ」

タナカは、サトウの手元から受け付けロボットの試作品をかつぱらうとそのまま研究室に消えた。

夕方、サトウが帰ろうとするとタナカが呼び止めた。そこには白い肌と黒髪を装備した受付ロボットがあった。

「ありがとうございます！」

「先輩」

サトウの浮かない様子にタナカはまたかと思った。

「なんだ、またうまくいかなかったのか」

サトウは大きくため息をついた。

「すみません。せっかく改良してもらったのに」

「今度の原因は何なんだ」

「なんでも、今度の相手はすごくスタイルがよかったらしいんです。ロボットのおかげで顔はちゃんと見えるようになったらしいんですけど、いったんそのスタイルを見てしまったが最後、もうグダグダだったらしくて」

「今度は体か。さすがに一日じゃ無理だな」

「え？ひょっとして先輩また改良してくれるんですか？」

「ここまで来たら乗りかかった船だ。やってやるよ」

それから三日後、呼ばれてサトウがタナカの元へいくと、そこには現実の女性と見間違ふほどに改良された例のロボットがあった。

「先輩、ありがとうございます！」

それから数週間たったある日、サトウが大きな荷物と小さな荷物をもって入社してきた。

「先輩、受け取ってください。いところからです」

そうやって小さい方の荷物を差し出した。あけてみるとそれは菓子折りだった。

「うまくいったのか」

「ええ、なんでも最高の女性に出会うことができたって喜んでくれました。お礼を言ってくれと」

「そうか、よかったな」

「なんでももう指輪も贈ってしまったらしいです」

「気が早いな。ほんとうに人見知りだったのか？」

ひとしきり笑った後、タナカが仕事にかかろうとすると、サトウはこんどは大きな包みを差し出した。

「なんだよ」

タナカが聞くと、サトウは言いにくそうに言った。

「いや、なんでも最高の女性に出会えたんだけど、強いて言えば唇の形が好みじゃない、もう少しプックリとした形になおしてほしいといわれちゃって」

大きな包みを開けると、そこには例のロボットがあった。ロボットの左手の薬指には大きな指輪が光っていた。

## ひとみしり克服ロボット

<http://p.booklog.jp/book/40734>

著者：川路 新吉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bowmoq/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40734>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40734>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.